

## 研修医・指導医リレーエッセー⑩



## 理想と現実のはざままで

岡山赤十字病院 臨床研修指導医 田岡 征高



岡山赤十字病院呼吸器内科の田岡征高と申します。

医師としての最初の2年間は、誰にとってもかけがえのない時間です。医学部というアカデミックな世界から飛び出し、初めて“生きた教科書”である患者さんと向き合うこととなります。そのひとつひとつの出会いや経験が、医師としての土台を形作っていきます。北垣先生の文章からは、まさにそのプロセスの中で悩み、もがきながらも前向きに歩もうとする姿が伝わってきました。

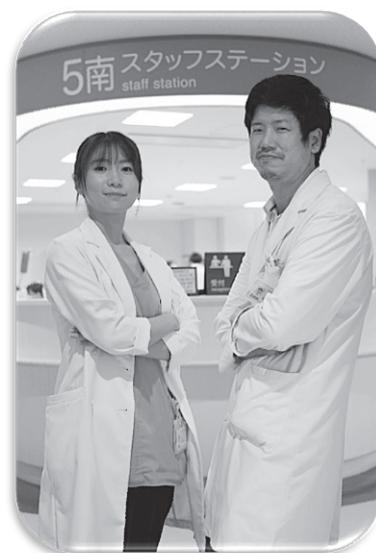
私は、研修医にはできる限り多くのことを経験してもらいたいと思っています。問診、身体診察、検査、処置はもちろん、最近ではリハビリや栄養、嚥下評価など多職種の見点も含め、医療の現場を広く見てもらうよう心がけています。そのひとつひとつが、将来どんな専門科に進むにせよ、必ず役に立つと考えているからです。そしてもうひとつ大切にしているのは、自らの“背中”を見せることです。「見て学べ」という古い意味合いではなく、理想とすべき医師像を少しでも体現できるよう努めることで、何かを感じ取ってもらえたらと思います。

北垣先生が1年目の前半に私の元へ来てくれた時のことをよく覚えています。柔らかな雰囲気の中に芯の強さを感じ、内科に向いているような、でも外科でもいけるような、どちらでもないような、どこか型にはまらない印象がありました。実際に研修をともにする中で、患者さんとの関わり方やマイペースながらしっかり研修へ取り組む姿から医師としての素質を随所に感じました。

彼女のエッセーを読んで、いかに彼女が色々な先生方の“背中”を見て育っているかが伝わってきました。私自身は呼吸器内科ですが、自分の科が好きなのは患者さんとゆっくり深く関わることができることだと思うので、なるべく患者さんと楽しくコミュニケーションを取って、治療を進めていくことを意識した記憶があります。信頼関係の構築や、いわゆるshared decision makingのプロセス、治療をするということは薬を調整するだけではなく心も癒すことであるということを“背中”で教えたつもりです。

その反面、患者の数が多く遅くまで残業しているのを見られたときには、こんなに忙しいのかと感じさせてしまったこともあったようですし、カルテをSOAP形式でちゃんと書くようにと指導しながら自分のカルテは数行しか残っていない日があったりなど汚い“背中”を見せることもしばしばあり反省の日々です。ただ、彼女のエッセーを見るにしっかり反面教師にできているようです。

進路を決めることは人生そのものを方向付けるような決断ですし、慎重になるのは当然です。指導医として、呼吸器内科を選んで欲しいという下心もありながら、その人の個性や価値観に合った道を見つけてもらうことが大切だと考えます。そして最終的に彼女が「私は私にしかできない」とたどり着いた結論は、本当に大事な気づきだと思いますし、自分が自分らしくいられるなかでぴったりな科を選ぶように少しでも手助けできたらと思います。これからも多くの経験を積みながら、ぜひ自分らしい医師像を育てていってください。指導医として、北垣先生の今後の活躍を心から楽しみにしています。



研修医の北垣先生と一緒に